The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中世日本海西部地域と国家的支配
Author(s)	佐伯, 徳哉
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49087
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【２】

氏　　名	佐　伯　徳　哉（さえき　のりや）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　２１５３２　号
学 位 授 与 年 月 日	平成 19 年 9 月 26 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化形態論専攻
学　位　論　文　名	**中世日本海西部地域と国家的支配**
論 文 審 査 委 員	（主査） 教　授　平　　雅行 （副査） 教　授　梅村　　喬　　教　授　村田　路人

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、出雲・石見など日本海西部地域における宗教権門や地域権力・地域経済の中世的展開を論じたものである。３部６章に序章・最終章とから成り、枚数は 439 枚（400 字詰め換算）である。

序章では、地域社会論に関する研究史をふりかえり、本稿の課題を提示している。第一部「出雲国一宮杵築大社の中世的景観」では絵図を素材に、杵築大社の実態に迫っている。第１章では、鎌倉中後期に描かれた『出雲大社并神郷図』について、現地での景観と対照させながら丹念に絵図を読み解いている。そしてこれが、京都とその周辺の景観を重ね合わせられる構図になっていると指摘している。第２章では、近世初めの寛文年間に作成された『杵築大社近郷絵図』について検討している。そして、①この『近郷絵図』には豊かな仏閣群が描かれているが、これらは 16 世紀前半の尼子時代に造立されたものである、②寛文２年より杵築大社は、幕府・松江藩との連携のもとで、景観の大幅な改変と神仏分離を進めたため、過去の具体的な景観情報をこの絵画に示して情報の共有に資した、と述べている。

第２部「出雲地域とその国家的支配」では平安末から鎌倉時代の杵築大社や鰐淵寺をとりあげ、地域と国家との関係を論じている。第１章では、天仁３年（1110）に出雲大社近辺の海辺に大量の用材が漂着し、これをもとに大社造営が成った事例をとりあげている。そして、筆者はこれを、出雲国を中心に勃発した源義親の乱（1107 年）の後始末の一環と捉え、この地域の政治情勢の危うさに対する白河院政の政治的対応である、と推測している。第２章では、出雲国鰐淵寺の勧進状を中心的な素材としながら、その成立の背景を明らかにするとともに、そこにうかがえる地域観や神国観を分析することによって、それが地域と国家の歴史認識を媒介・接合する機能を果たしていたと指摘している。

第３部「日本海西部地域と東アジア」では、戦国期の出雲・石見における地域秩序の変容をとりあげている。第１章では、16 世紀の石見銀山の開発が石見から北九州の地域経済を活性化させていたとし、石見銀山の支配が尼子氏から毛利氏に移ったことが、尼子氏と毛利氏の急速な凋落と急成長の要因となったとする。第２章では石見山間部の在地領主であった福屋氏をとりあげ、①地域内流通の発展が福屋氏の港湾部進出をもたらした、②広域支配権力である毛利氏が石見に進出してきた時、福屋氏配下の土豪は福屋氏から離反していった、と述べている。終章では本稿を概括するとともに、今後の課題を展望している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、中世の出雲・石見の地域社会の実態とその歴史的変遷を、景観や寺社・流通経済・地域権力など、多様な素材とさまざまな観点から丹念に跡づけている。

たとえば『杵築大社近郷絵図』について、申請者は諸史料を駆使しながらその成立事情を明らかにしているし、神仏分離前の出雲大社近辺の景観や豊かな仏閣群を、現地の景観と対照させながら丁寧に読み解いている。また、建長６年鰐淵寺衆徒勧進状が成立した背景として、①杵築大社造営が一段落したこと、②鰐淵寺の本寺である青蓮院門跡の内部混乱があるとの指摘も重要である。さらに、石見山間部の在地領主・福屋氏の戦国期における急速な成長と滅亡の背後に小地域経済秩序の広域化があったことを解明しているし、応永・文明期に諸大名・諸領主が盛んに朝鮮に使者を派遣した背景に、応仁の乱の勃発にともなう北九州・対馬地域の政治的混乱があったことを明らかにしている。このように本論文は、中世の出雲・石見地域史研究への貢献である。

とはいえ、本論文にも問題がないわけではない。論証がなお十分でなく、その主張が仮説の域に留まっているものも散見する。出雲大社の西にある稲佐浜を四天王寺の難波津に類比したり、天仁３年の造営用材漂着を、院近臣の藤原為房の主導で調達されたと解した点などがその例である。しかし本論文の達成をもとに、今後とも筆者の地道な研究によって、自らの構想をさらに深めてゆくことが期待される。

よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。